

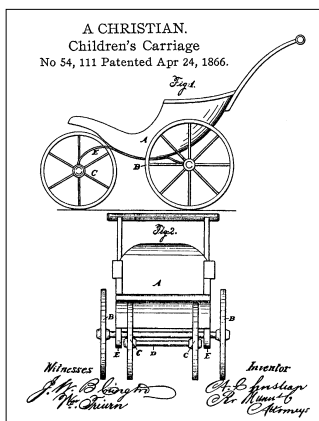
福澤研究センター通信

News letter of Fukuzawa Memorial Center for Modern Japanese Studies, Keio University

創刊号 2004年9月30日 発行

目次

*創刊にあたって 小口彦太	2	*主な動き	9
小室正紀		*主な新収資料	10
*講演会・セミナー概要	4	*諸記録	12



乳母車の設計図



一太郎・捨次郎兄弟と乳母車



長さ1450mm × 幅700mm × 高さ1020mm

* アメリカで購入した乳母車 *

慶応3（1867）年幕府が購入した軍艦引取りのため渡米した際、長男一太郎（文久3年生）次男捨次郎（慶応元年生）のために購入した乳母車。ニューヨークの Andrew Christian が、前年4月に特許を与えられた安全性の高い四輪式のもので、当時最新式であった。この乳母車が日本において人力車のヒントとなったという説もある。

参考文献：清岡暎一「福澤先生の乳母車」『福澤論吉全集』第18巻付録（昭和37年5月刊）

「福澤研究センター通信」創刊に寄せて

こ ぐち ひこ た
小 口 彦 太

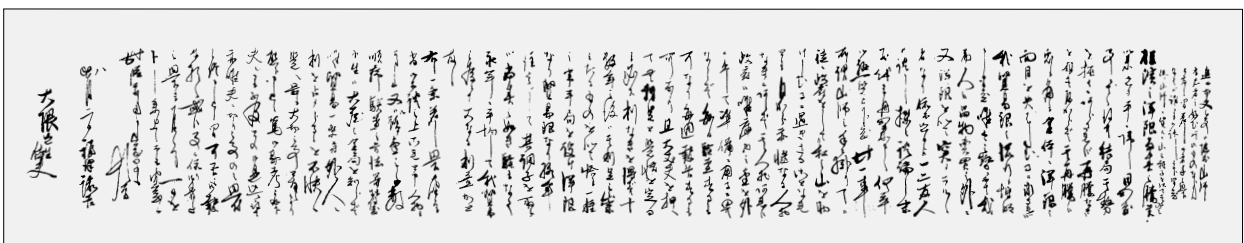
(早稲田大学 大学史資料センター長・法学部教授)

このたびは「福澤研究センター通信」を創刊されるとのこと、心よりお祝い申し上げます。「福澤研究センター」は、その事業として、①慶應義塾史資料の収集・整理・編纂と、②慶應義塾と福澤諭吉を何らかの意味で視野に入れた近代日本についての研究を使命とするとのこと、心より敬意を表する次第であります。と申しますのも、私ども「早稲田大学 大学史資料センター」は、上記二本の事業の柱のうち、現在のところ、結局①の事業に特化せざるを得ず（この面では大隈重信関係文書の本格的翻刻出版を本年より開始することとなりましたが）、研究的機能を果たし得ていないからであります。まして、貴センターが来年度よりカリキュラム上の正規の講座を開講されるということを聞くに至っては、垂涎の思いを禁じ得ません。将来いつの日か、私どものセンターも貴センターのような諸々の機能を果たすことができるようになりたいと念じております。

ところで、大隈重信は明治十四年の政変で下野を余儀なくされますが、この政変は「福澤にとって、単に甥（筆者注 中上川彦次郎）を含む慶應義塾出身の官僚たちの失業ばかりではなく、彼が新たに乗り出そうとしていたビジネス（筆者注 新聞発行事業）の頓挫をも意味していた」（平山洋『福澤諭吉の真実』8頁）と言われております。このように福澤と大隈の両人は近代日本構築のデザインを共有する友人どうしでありましたが、まことに対蹠的な違いが一点あります。それは、福澤が著書、論説、手紙と実に多くの書き物を残しているのに対して、大隈は、彼の字を見たことがないと言われるくらいに、書き物の類をほとんど何も残していないという点であります。これは、実に私どもセンターの泣き所であります。もともと福澤のように膨大な数の論説、手紙を遺している場合にも（私事にわたって恐縮ですが、私の家内の父方の親類にも福澤から手紙をもらった者がいたそうです）、その収集整理は大変なことと思われまし、福澤自身の論であるかどうかの識別が問われるような問題も生じるでしょう。平山洋氏の前掲書のような著書が公刊される所以であります。

貴センターの今後ますますの発展を心より祈念いたしております。

【大隈重信宛福澤諭吉書簡】



明治12年8月2日、外国為替銀行のごとき機関の必要性を提案している手紙。この提案は、翌年、横浜正金銀行の設立に結実する。大隈宛の福澤書簡は現在38通が発見されており、両者の親交がうかがわれる。

二十一年目の福澤研究センター

こ むろ まさ みち
小 室 正 紀

(福澤研究センター所長・経済学部教授)

福澤研究センター（以下、「センター」と略す）は、慶應義塾創立125年を記念して昭和58（1983）年に設立された研究所であり、昨年で創立20年となる。20年という丸い数字にこだわるわけではないが、ちょうど、これまでの実績を踏まえつつ、新たな姿勢で諸課題に取り組まなければならない時期にきている。

元々、センターは、塾史資料室を全面的に改組して発足した研究所である。したがって、その目的の一つとして、「福澤諭吉および慶應義塾に関する資料の収集・整理・保管」があることは言うまでもない。しかし、センターは、単なる塾史の資料室ではない。同時に、福澤諭吉や慶應義塾を視野におきつつ、日本の近代化について研究することも目的としている。この点は、むしろセンターの英文機関名、Fukuzawa Memorial Center for Modern Japanese Studiesの方に明確に表されている。また、このような資料収集や研究の成果を、紀要やその他の刊行物、あるいは講演会やセミナー、また時には展覧会などを通して、広く発表することも、センターの使命である。

このような設立主旨を、現時点で、あらためて振り返ってみると、課題は山積している。第一には、教職員採用の公開制の増大などにもとない、教職員にも学生にも、福澤諭吉や慶應義塾の歴史が意識されることが少なくなってきている。といっても、義塾に無批判な愛着を注ぐべきだというのはない。しかし反対に、メンバーが、自分が属する組織の歴史を全く意識していないとすれば、それは「私立」の「社中」^{ソサイエティー}として、緊張感を欠くことになる。こうしたことを考えれば、福澤諭吉と慶應義塾を視野においた近代日本研究の成果を、学生等へ伝えることは、今日あらためて求められていると言える。センターは来年度より、三田で講座を開設するが、その目的の一つは、こうした需要に応えるためである。

第二に、大学史・学校史の研究は、かつてのような記念事業的なものではない。大学が社会の重要な一部である今日、大学史は、企業史などとならんで、近代史の重要な分野となってきている。そのような中で、センターは、他大学の大学史研究機関や研究者と協力して、大学史・学校史の研究所としての機能を果たして行かなければならないだろう。ちなみに、義塾は2008年に創立150年となる。センターでは、この時期を記念して、『慶應義塾150年史資料集』全20巻の刊行を開始することを決

定し、現在その準備を進めている。われわれは、この『資料集』編纂を通じて、大学史・学校史の研究水準を少しでも高めることに貢献したいと考えている。

また第三に、センターにとって、福澤諭吉研究の世界的中心としての役割を果たすことは、言うまでもなく重要な課題である。それは単に、福澤諭吉が、義塾の創設者だからというだけではない。福澤の思想をどのように理解するかは、近代日本全体の見方にかかわってくることであり、また世界史上における諸国の近代化を考える一つの鍵でもある。この点で、現在考えなければならない課題の一つは、新たな『福澤諭吉全集』の編纂だろう。半世紀近く前に編纂された現行版『福澤諭吉全集』は、その時点としては最高水準のものであったが、あらゆる『全集』は歴史的な産物である。21世紀の今日には、また別の『福澤諭吉全集』を編纂し得るし、また、しなければならない。センターではこのための研究や準備も進めなければならないだろう。

第四には、センターは、福澤諭吉と慶應義塾という課題に特化した資料館でありまた図書館でもある。そこに収蔵されている資料と図書は、まずは所員による研究のためのものではあるが、同時に多くの研究者が利用できるようにしなければならない。そのためには、現在すすめている資料のデータベース化や図書検索の機械化作業は勿論のこと、資料収蔵環境の改善など施設の面も検討してゆかなければならない。

最後に、これはセンターだけの課題ではないが、将来のユニバーシティ・ミュージアム開設の可能性に対しても、備えておかなければならないだろう。センターは福澤の遺品や草稿などを所蔵しており、ミュージアム開設ということとなれば、果たすべき役割は多いはずである。

思いつくままに、現在のセンターの課題を列举したが、その大きさに比すれば、センターの組織も資力も微弱である感はぬぐえない。そうした中で、出来る限りのことを行うには、義塾内外の関心を同じくする人々や機関との協力を密にしてゆくことが不可欠である。今回、ニューズレター『福澤研究センター通信』を創刊したのは、センターの活動を広くご理解いただき、そのような協力体制を築いてゆく一助となればと願ったのである。どうか、この主旨をお酌み取りいただき、二十一年目以降の福澤研究センターを、これまでも増して宜しくお願い申し上げたい。

今年度春学期、福澤研究センターでは講演会を1回、セミナーを2回、以下の概要のとおり開催しました。



三田演説館で講演する西田毅氏

精神史的にみた福澤諭吉と徳富蘇峰

—『瘠我慢の説』にみられる歴史認識を中心に—

にし だ たけし
西 田 毅
(同志社大学教授)

「立国は私なり、公に非ざるなり」、「忠君愛国の文字は、哲学流に解すれば、純乎たる人類の私情なれども、今日までの世界の事情に於ては、之を称して美德と云はざるを得ず」で始まる『瘠我慢の説』は、福澤の最晩年、死の直前（明治34年1月1日の『時事新報』）に発表された。この勝海舟批判の一文は非常な反響を巻き起こし、囂々たる賛否両論が寄せられたという。ここで取り上げる蘇峰の反論もその一つである。すなわち、蘇峰は早速『国民新聞』（1月13日）に「瘠我慢の説を読む」と題して、勝弁護の論陣を張った。民友社の同僚であった山路愛山も、同じ標題（1月19日）で論評している。

福澤の勝批判は、要約すれば、「公」＝大義名分と私＝廉恥節義の問題を、「時勢」と「自我」の緊張関係においてどのように捉えるべきかという問題の提起に尽きるが、この封建的「士魂」にこだわる生き方に、立国の士気（「人民独立の気象」）や「抵抗の精神」の創造を託した福澤の問題の意義は、蘇峰に正当に理解されたと考えられない。すなわち、「瘠我慢」の意義を認識する点では「福澤氏と二論なき也」と断わりながら、「立国は私なり、公に非ざるなり」という福澤の名分論批判

と謀叛論の核心をなす論点については、「立国は私なる乎、公なる乎、此の如き学者的問題は、暫らく之を避け、国民が緩急に際し、利害得喪を度外視して、国家と存亡を俱にするの精神は、実に大切なもの也」と肝心の論点がさらりとかわされている。そして「旧日本」の改革の道筋を専ら「天下の大勢」、「自然の大勢」の機敏な把握と順応に見出している。つまり、蘇峰の勝弁護の論点は、「瘠我慢」の精神の用い方に絞られるのである。蘇峰が勝擁護の最大の論点としてあげるのは、幕末日本の亡国の危機であるが、勝はかかる国家存亡の時にあって、狭く「徳川氏対薩長の見地」ではなく、「日本対世界の見地」という「大処」、いわば「国家全局」の視圏で「瘠我慢」の精神を用いたと説く。そして、聡明、先見、常識、思慮と結びつかない「瘠我慢」の精神が国家社会に出現するとき、往々にして「頑冥、固陋なる攘夷的精神」に昇華する危険性を隣国の「義和団の乱」を引きながら強調し、具眼卓識、開国論をもって鳴る福澤が、あまりに「権衡を失したるの立言の為に、意外なる随喜者を出さん事を懸念」している。これに対して福澤は、蘇峰の立論が「幕末外交の真相を詳にせざるが為に、折角の評論も全く事実に適せずして、徒に一篇の空文字を成したるに過ぎず」と一蹴し去り、蘇峰が強調した差し迫った「外国の干渉」という事実認識の誤謬に絞って論駁している。福澤は旧幕内部の「機密」にも触れながら、幾多の新事実を指摘し、たとえば、蘇峰が批判の対象にあげた小栗上野介とフランス公使ロッシュの関わりについて、小栗が「精神気魄、純然たる当年の三河武士」であり、「外国の力を仮りて政府を保存せんと謀りたりとの評の如きは、決して甘受せざる所」であると力説する。さらに、英仏らの列強勢力が日本の内乱に介入する意図の希薄さにも言及している。このような「外国干渉」の事実認識のズレに驚かざるを得ないのであるが、蘇峰が、その後多数ものした福澤論において、この幕末政治史の一端に関する反論は管見にして知らない。

しかし、福澤がもっとも強調したかったのは、やはり、「幕臣」勝の「士人」としての徳義操行、そして維新後における「晩節」の問題であろう。福澤曰く、「瘠我慢の一主義は、固より人の私情に出ることにして、冷淡なる数理より論ずるときは、殆んど児戯に等しと云は

るゝも、弁解に辞なきが如くなれども、世界古今の實際に於て、所謂^{いむゆる}国家なるものを目的に定めて、之を維持保存せんとする者は、此主義^よに由らざるはなし、そして「百千年の後に至るまでも、一片の瘠我慢^{たいはん}は立国の大本として之を重んじ、いよゝますゝ之を培養して、其原素の発達を助くること緊要なる可し」。ここには、「時勢」と「自我」の緊張関係にこだわらず、時代の変り目に「天下の大勢」、「勝てば官軍」といった、「時勢」に素早く身を委ねる生き方を拒否して、あえて、封建的「士魂」にこだわり、そこに「立国の士気」（「人民独立の気象」）や「抵抗の精神」の形成を意図した福澤の姿勢がみられる。

花田清輝は蘇峰の反論を評して、「通俗的な意味でのリアリスト」といったが、福澤が強調する武士の精神、節操の解釈を通して、近代日本の言論界における二大巨人の歴史認識や公共的倫理の対照を具に見ることができよう。（本稿は、2004年6月18日に開催された第1回福澤研究センター講演会の概要である。）

明治版『福澤全集』編纂協力者

奥田竹松について

まつ ざき きん いち
松 崎 欣 一
(慶應義塾志木高等学校教諭)

明治版『福澤全集』（全5巻）は明治31年1月～5月に刊行されている。全集編纂の着想はすでに明治27年頃にあったが、実際に刊行の準備が本格化したのは30年夏頃であったようである。同年8月～9月に奥田竹松に宛てた5通の福澤書簡が残されており、福澤著書書の収集や目録づくりが奥田によって進められていることがわかる。その仕事ぶりに福澤は満足できなかったらしく、いずれの書簡にもかなり厳しい叱責のことばがある。現行の『福澤論吉全集』に収められたこれらの書簡には、『続福澤全集』のそれを踏襲して、「明治版『福澤全集』出版のときその編纂を奥田に託したが、この書簡の如き始末で更に他人に託して刊行の運びとなった」との注が付されている。このことのためか、奥田の名は早くから埋もれてしまい、今日ではほとんど知られていない。全集の注にいう奥田に替わる「他人」については詳かではない。奥田に託された仕事も、実は「編纂者」というよりはむしろ実務的な協力者としてのそれであった

ように見える。そもそも「編纂者」は初めから存在しなかったのではないか。あえて求めるとすれば、収録著作の解題を「全集緒言」として新たに執筆し、またいくつかの福澤書簡に見るように、著者名の扱い、全集の価格設定、予約方法など福澤が細部にわたって気を配っていることなどからすれば、「編纂者」は福澤自身であったといつてよいと思われる。

ところで、奥田は明治7年生まれで岡山市紙屋町の出身である。25年1月に慶應義塾大学部文学科に入学し、27年12月に卒業している。卒業後、神戸の山陽鉄道に入社した。29年末に退社して、31年には外務省に入った。仁川、天津、漢口、ウイーン、ハンブルクなどの在外公館に前後18年間にわたり勤務し、ハンブルクでは総領事に任じた。退官後、しばらく白木屋呉服店専務理事を務め、晩年には郷里岡山の岡北中学校(旧岡山黌)校長となり、昭和9年に没している。

なお、奥田は30年6月に卒業論文を訂正増補した『仏蘭西革命史』を出版している。これには文学科で教鞭を執っていたアーサー・ロイドが推薦の序文を寄せ、塾長小幡篤次郎が題字の揮毫をしており、奥田が在学中から将来を期待された人物だったことが現れている。本書はかなりの読者を得たようである。41年に改訂増補版が出され、43年には3版が刊行されている。本書の意義については高橋暁生氏の報告に詳しい。また、31年3月に創刊された『慶應義塾学報』には、奥田の4篇の論説——「英国殖民地防備論」（創刊号）、「国際法上国家干渉権の区域を論ず」（12号）、「支那政府組織」（29, 30, 32, 33, 35, 36号）、「商工業発達と都市膨脹」（31号）——が掲載されている。さらにこの頃、慶應義塾内部で進んでいた学制改革の機運を塾外から支援する「三田篤学会」の発起人4人の内の1人としても名を連ねている。三田演説会においても、「滞欧中の所感」（明治44年9月30日）、「在独中の所感」（大正13年5月30日）という2回の講演を行っており、その講演録が前者は『慶應義塾学報』172号、後者は『三田評論』217号に掲載されている。

このようなことからすれば、全集刊行に協力するような福澤の依頼を受けて、それほど杜撰な仕事をするような人物であったとは考えにくい。奥田宛の書簡に見る福澤のいらだちは、全集の完成を急いだこの頃の福澤と奥田の歩調が揃わなかったことの結果だったように思われる。

（本稿と次の高橋氏の稿は、2004年5月14日に行われた第1回福澤研究センターセミナーの概要である。）

奥田竹松著『仏蘭西革命史』に見る

ある義塾卒業生の思想的諸側面

たか はし あけ お
高 橋 暁 生
(慶應義塾大学講師)

明治から大正期に外交官として活躍した奥田竹松は、明治27年の慶應義塾大学部文学科卒業時にフランス革命をテーマとした卒業論文を書く。その後、これに手を加えたものを『仏蘭西革命史』として30年に出版している。以下、この著作に関して第一に同時代的な研究水準、第二にその特徴とそこに見られる奥田の思想的特質について概観する。

歴史研究としてのレベルは、総評としては高いと言えるだろう。事実関係の描写を含めた無視できない誤りも少なからず見つかるものの、ヤングの『フランス紀行』、革命当時の新聞『パリの革命』など現在でも参照される一級の史料や、欧米の研究書を多数参照し、革命の原因、経過、結果について政治、社会、経済、宗教、思想といったファクターに目を配りながら詳述している。もちろん、全体として現在の研究水準とは比較できないが、事件・事象への解釈の中にはなお傾聴に値するものもある。柴田三千雄は、大正期の箕作元八著『フランス大革命史』を日本における最初の本格的な革命研究としたが、研究書としての資格を十分に有した作品が、19世紀末にすでに見られたことを強調したい。

次に特徴を見よう。この著作は1789年から99年の革命期と1815年までのナポレオン期全体を扱っているが、司法改革など幾つかの点を除いて、奥田はフランス革命をほぼ一貫してネガティブに見ている。土地所有の細分化、宗教(キリスト教)への攻撃、王政廃止(国王処刑)、激化する党派抗争といった事件・事象は強く非難され、特に奥田が一貫して「乱民」と呼ぶ民衆層の政治参加や干渉、またそれを許した指導者たちは激しい嫌悪の対象となる。たとえば革命最大の所産である『人権宣言』について奥田は次のように書く。

固と多少の真理之なきにあらざと雖、「人権平等」「主権在民」「普通撰権」の三事に至りては危険極まりなく、明らかに立案者の愚蒙を表露せるものなり。起草者デウマンの如きは案の背理なるを知ると雖、下民

の冀望に逆らひその歡心を失は去らんことを慮り意を枉げて之に従へりと云ふ。

このような革命観には奥田の思想が強烈に反映されている。政治的には政党の乱立・離合集散が繰り返され、自由民権運動の影響が依然各所で見られ、社会的には全国で米騒動が頻発し、繊維産業におけるストライキが目立ち、また社会主義的な思想傾向を持つ運動が勃興しつつあった19世紀末の日本、その只中に奥田はいた。この『仏蘭西革命史』は、当時の日本社会に生きる者、そしてやがてこれをリードすることを夢みた未来のエリートの思想的発露なのである。あるいはより積極的に、主体的意図を持って発信されたメッセージとして捉えるべきかもしれない。激しく嫌悪する革命について詳述し、400頁近くの本として出版したことの意味を考えたい。「自由」「平等」を謳い、「共和政」を志向し、相対的に広範に選挙権を認め、激しい党派抗争を招き、民衆の政治への干渉を許して、結果的に秩序の破壊、社会の大混乱を引き起こした革命の描写は、19世紀末の、為政者を含めた日本社会全体への一種の警鐘だったとも考えられよう。

奥田の躍動感溢れる熱のこもった筆致には、文語調に不慣れた私でもぐいぐい引き込まれていく力があつた。作品に込められた彼の強い主張こそが、この力の根源だったと思う。フランス革命の研究書として現在の我々がこの著作から学ぶことは多くはない。むしろこの作品は、以上のような革命観を通した、奥田竹松の思想的作品として依然価値を持っているのである。



福澤諭吉と明治民法の家族観

むら かみ かず ひろ
村 上 一 博
(明治大学教授)

本報告では、福澤の民法（とくに家族法）理解という問題について、1950年代初めに『福澤研究』誌上で展開された玉城肇＝中村菊男論争を起点に、福澤が、（１）なぜ旧民法施行延期派に与したのか、（２）なぜ明治民法を無批判的に歓迎したのか、という二つの論点に絞って検討したい。

（１）福澤は、旧民法の施行をめぐる所謂「法典論争」において、延期派の立場をとった。福澤は言う。「我輩は未だ法典の原案を見ざれども」^①、「世間の評論…総体に之を概見して評を下すときは其法の文面も亦精神も大半は純然たる西洋主義に出でたるもの」^②、「世上に伝る一説に拠れば今度の法典は頗る西洋流のものにして其法の新奇なるのみか章句文字までも新奇を極め且その箇条の繁多細密なるは諸外国の法典にも優る程のもの」^③であり、明治政府が旧民法を急いで編纂施行しようとするのは、「条約改正と密着」^④していることは明白であって、「明年開く可き帝国議会…に諮詢し其協賛を得て然る後に之を編成するも晩きことはなかる可し」^⑤、と。すなわち、福澤は、明治22年当時の旧民法批判の世評、とりわけ法学士会「法典編纂ニ関スル意見書」（同年5月）に依拠しながら、旧民法が内容的には旧来の慣行を斟酌せず西洋法を模倣した新奇の立法であること、政治的には、条約改正実現の付带的条件として、帝国議会開設前の完成をことさらに急ぐ政府の姿勢を批判したのである。このような認識は、植木枝盛にも同様に見出されるから、当時の知識人層の共通認識であったようだが、植木があるべき民法（とくに家族法）について所説を積極的具体的に展開するのに対して^⑥、福澤にはかかる姿勢が見出されない。

（２）福澤は、明治民法について、「日本社会にて空前の一大変革…就中親族編の如きは、古来日本に行われたる家族道徳の主義を根柢より破壊して更らに新主義を注入し、然かも之を居家处世の實際に適用すべしと云ふ非常の大変化にして、所謂世道人心の革命」であって「恰も強有力なる味方を得たるの思ひ」^⑦を抱いたと言われており、とくに『女大学評論』において、婚姻の成立要件としての父母の同意（親族編771条）と、離婚原因（同

◇秋の講演会・セミナー

テーマ「北東アジアの伝統と福澤諭吉」

《講演会》

第2回：「韓国における“福澤諭吉”」

林宗元氏（韓国・関東大学校人文大学
学長・福澤研究センター客員所員）

10月29日（金）午後3時～4時30分

第3回：「近世儒学思想史と福澤諭吉」

平石直昭氏（東京大学社会科学研究所教授）

11月12日（金）午後3時～4時30分

いずれも会場は三田演説館

《セミナー》

第3回：「韓国／朝鮮における近代国家思想の形成と日本」

國分典子氏（愛知県立大学文学部教授）

10月16日（土）午後3時～5時

第4回：「韓国近代思想史における対外認識と『競争論』の初期的展開——兪吉濬と福澤諭吉の思想比較を通して——」

岡克彦氏（長崎県立大学経済学部助教授）

11月6日（土）午後3時～5時

いずれも会場は三田・研究室棟1階A会議室

※講演会は広く一般の方々を対象とし、セミナーは大学院生レベル以上の方々による研究会の形をとっています。

812条）の条文を解説して、その「革命」性を強調している^⑦。しかし、第771条は、父母の同意を原則的に必要とし、男30歳・女25歳以上の場合を例外と定めるとどまり、また第812条は、姦通の場合の男女差別を明記するなど、女性差別の構造（ジェンダー）を内包している。福澤は、明治民法の限界性に——おそらく気付きながらも——あえて言及せず、一夫一婦制の明記など家族秩序に法規範が定立されたことを強調し、これを歓迎・評価したのである。こうした明治民法に対する福澤の評価は、永年の懸案であった治外法権の撤廃時期が目前に迫っている状況を所与として捉え、「浮余談」^⑧などで、妾の解消でなく隠蔽を強調していることを併せて考えると、明治前期の『学問のすゝめ』などに見られた、かつての啓蒙的で直截な家族秩序批判はかなり後退して、「現実主義者」たる福澤の一面が前面に表れるに至ったと解さざるをえない。

- 【注】①福澤諭吉「法典發布の利害」（明治22年8月30、31日付「時事新報」。以下④迄同紙より引用）
 ② 同「条約改正、法典編纂」（明治22年7月17、18日付）
 ③ 同「法典と条約」（明治24年1月6日付）
 ④ 同「法典編纂の時機」（明治22年7月25日付）
 ⑤植木枝盛「如何なる民法を制定す可き耶」『国民之友』60・61号（明治22年8月22日、9月2日）
 ⑥時事新報記者「福澤先生の女学論発表の次第」（明治32年4月14日付「時事新報」）
 ⑦福澤諭吉『女大学評論・新女大学』（明治32年11月刊）
 ⑧ 同『福澤先生浮世談』（明治31年2月刊）

（本稿と次の早川氏の稿は、2004年7月10日に行われた第2回福澤研究センターセミナーの要旨である。）

家と庶子制度

－旧民法第一草案と三一年民法－

はや かわ のり よ
 早 川 紀 代
 （フェリス女学院大学講師）

私の報告の趣旨は以下のものです。

1898年、明治31年に成立・施行され、その後若干の改正がおこなわれたが、草案の起案者や「法典調査会」の委員たちが予測したほどの大改正がおこなわれず、1948年1月施行の新民法まで存続した明治民法の草案と、明治4年以来数多く作成された草案のうち旧民法の草案である第一草案の類似性を、家と庶子制度の関連を考える視点からとりあげること、つぎに明治民法がもつ矛盾を、私の考えによれば、男系の男子による万世一系の天皇に政治上、軍事上の大権を付与した近代天皇制と立憲議会制度という二重構造からなる日本近代の政治体制と関連づけて考えてみることで、最後に両者にかかわって、福澤諭吉の家族論および両性論をとりあげることです。福澤は男女両性の関係を常に説いているので、今日のジェンダー論の元祖といえるかも知れません。

* * *

ボアソナード門下の司法省法学校出身者が起草した旧民法第一草案は、つぎの点で近代法を適用し、出色の特徴をもっていたと思われる。第一に慣習尊重を謳いつつ、その慣習の最たるものである戸主制と連結した家督相続制度では、戸主は家長ではなく、したがって戸主の権利と義務は規定されておらず、家督相続は子のいずれでもよく、遺産相続も分割相続であり、家族成員の所有権が保障された。

つぎに庶子は、江戸期の家督相続権を有する妾腹の、父が認知する庶子ではなく、私生子一般の規定に解消された。したがって夫と妻双方に貞操義務が課され、夫の婚姻外の子にたいする妻の、また入夫の家にたいする擬似的血縁関係は排除され、夫婦中心の家族が想定されていた。また親権は子の権利と考えられ、裁判離婚の姦通原因や子の婚姻許諾年齢など仏法を批判して妻や子の権利を保障する傾向が強かった。これらの特色は旧民法制定過程で、永遠の皇室の継承と同様に国民の家も廃絶を嫌うという理由により長男単独相続を原則とし、したがって戸主権と父単独の認知によって家督相続する庶子制が成立する。旧民法は法全体を貫通する、権利・義務の関係による人間関係の規定にたいする批判が強く、商法とともに1892年第三帝国議会で施行延期になる。

その6年後の1898年に梅、穂積、富井が起案した草案およびこれを審議した法典調査会および調査会規則を審議した主査会の議論は、一度否定された旧民法第一草案のいくつかの特徴（庶子制や擬似血縁制の否定など）が復活し、調査会の審議は家督相続制に強い戸主権を結合させた伝統的家族制度と家督相続制に家族出入の監督に限った戸主権、弱い戸主権を付随させ、西欧に共通する一夫一婦制と夫権を認める個人主義家族（調査委員の岸本辰雄の表現）の対立が、後者を優勢に進行した。三一年民法には成人男性の分家、女性戸主、戸主権に優先する親権や夫権など旧民法にない規定が設定された。が、伝統的家族制度はいずれ消滅するという認識のもとで、天皇制と国体という社会秩序維持のために庶子制を残した家督相続制度が維持される。しかしこの家督財産は市場経済の展開のために相続者の個人財産にするなど、近代社会を構成する人間関係を規定するうえで、溶解できないいくつかの矛盾をもっていた。政治体制の二重構造と同様に市民社会を規定する家族法もまた二重構造を内包していた。この二重の二重構造が日本型国民国家であり、この矛盾は日常の暮らしにさまざまなかたちで現象した。男性の性の解放と妻の性の閉鎖、妻と嫁への女性の身体の分裂などとして。

福澤の家族論および両性論は、旧民法第一草案および三一年民法草案に共通する側面を多くもっている。さらに妾を黙認したことをくわえれば成立民法の矛盾を共通してもっている。私見によれば福澤は1880年前後から80年代に日本型国民国家像をつくりあげた。この福澤の国民国家に対応する家族が、妾と娼妓に補完された、中産階級の国民の対等な一夫一婦家族ではないだろうか。

■ 規程改正

—講座の開設をしたり、専任所員を置けるようになりました—

福澤研究センターは設立以来、研究成果を学生に還元することを想定していましたが、規程上は、そのことが明記されていませんでした。また、資料収集・整理・編纂や福澤研究、大学史研究を始めとする専門的で広範な事業を行っているにもかかわらず、これまでは専任所員を置けない規程となっていました。

7月に、このような点が改められ、福澤研究センターが大学で正規の講義を開講できるようになり、また専任所員（大学教授、助教授、専任講師、助手）も規程上は雇用できることになりました。

■ 写真データベースの構築

福澤研究センターは、幕末から昭和に至る福澤諭吉・慶應義塾関係の1万点をこえる写真を所蔵している。昨年度秋から、牛島利明商学部助教授をプロジェクト・リーダー、武正恒事務長を所内責任者として、これらの写真のデジタル化、データベース化に取り組んでいる。本年度中に一定の成果を目指しており、今後、塾内外における貴重な写真データベースとなることが予想されている。

■ ホームページ開設

福澤研究センターのホームページが5月に開設された。本センターの所員紹介や活動現況ばかりでなく、『近代日本研究』のバックナンバー、過去の講演会・セミナーの全リスト、センターの出版物リストなども見ることができる。また、今後は講演会やセミナーの報告要旨なども掲載される予定。URLは以下のとおり。ご利用ください。

<http://www.fmc.keio.ac.jp/>

■ 蔵書の配置転換

福澤研究センターは、特定主題の研究所で、かつ大学史資料室という機関であり、その蔵書の選択や整理法・配架は、必ずしも一般向け図書館と同じではない。現在、本センター所属のライブラリアンを中心として、大学史研究所としての図書整理法について検討中である

が、その第一歩として、2月に請求記号に合わせて蔵書の全面的配置転換を行った。

■ 資料収蔵庫の改装

福澤研究センターの資料室は約50㎡の小規模なものであり、既存の資料の収蔵にも困難を来していたが、この程、資料を一時的に搬出して、全面的に新収蔵棚および調湿機能を持つH Cキャビネットを入れ、同面積の範囲内でできるだけ多くの資料をよりよい環境で収蔵できるように改装した。

しかし、今後、『慶應義塾150年史資料集』の編纂などのため、新資料の収蔵が激増することが予想されており、抜本的な収蔵庫の拡大が望まれている。

■ 「福澤研究センター講座」の開講決定

平成17年度より、「近代日本研究Ⅰ」（春学期）、「近代日本研究Ⅱ」（秋学期）、「近代日本研究演習Ⅰ」（春学期）、「近代日本研究演習Ⅱ」（秋学期）の4科目を三田キャンパスで開講することになった。大学全学部（通信教育学部を含む）の学生が受講でき、履修さえすれば、卒業単位に加算することもできる。

■ 『慶應義塾150年史資料集』の刊行決定

6月23日の運営委員会において、『慶應義塾150年史資料集』（仮題）全20巻の刊行が決定した。同『資料集』は第Ⅰ期「基礎情報編」5巻、第Ⅱ期「新学制期」5巻、第Ⅲ期「旧学制期」5巻、第Ⅳ期「幕末明治期」5巻の4期に分け、150周年の2008年より20年をかけて刊行する予定。

■ 経済学部講座「近代日本と福澤諭吉」に協力

経済学部は、全学部へ開放する形で、本年度秋学期に日吉キャンパスにて「近代日本と福澤諭吉」を開講する。講義内容は、1. はじめに（小室正紀）、2. 明治の実業と福澤諭吉（平野隆）、3. 慶應義塾と福澤諭吉（松崎欣一）、4. 明治法制と福澤諭吉（岩谷十郎）、5. 近代国家形成と福澤諭吉（小野修三）、6. 十九世紀西欧思想と福澤諭吉（樽井正義）、7. 地縁・家・家族と福澤諭吉（西澤直子）となっており、福澤研究センター所員が、出講者として全面的に協力している。

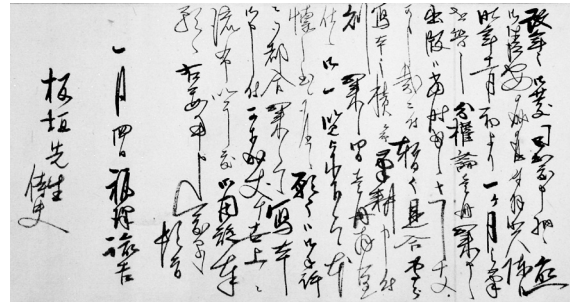
主な新収資料

平成16年4月から8月までに新たに収蔵された資料のうち、主なものを紹介する。なお、資料の全文や詳しい解説は『近代日本研究』第21巻（平成17年3月刊行）に掲載の予定。

福澤諭吉書簡

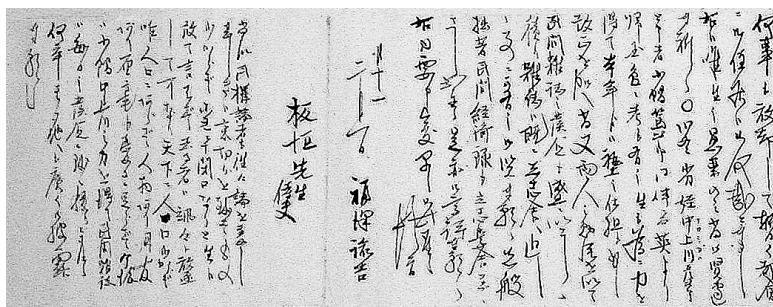
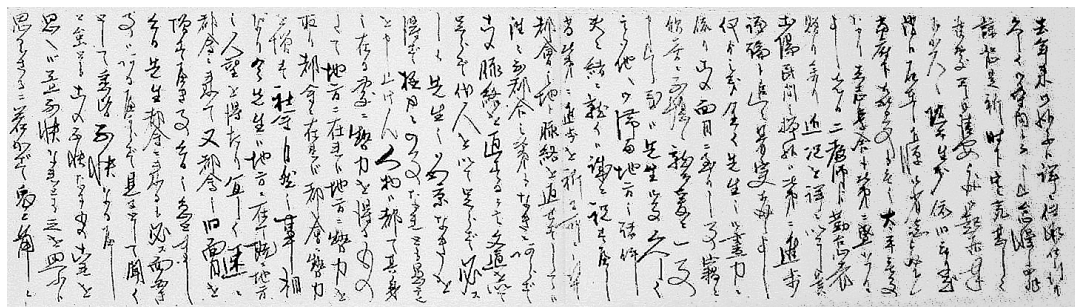
■ 板垣退助宛 明治10年1月4日付【未発表資料】

新年の挨拶と出版条例への対策から「分権論」を写本で進呈する旨を述べたもの。この書簡に対する板垣の返書はすでに知られていた（『福澤諭吉全集』第21巻361頁掲載）が、福澤の書簡は未発見であった。



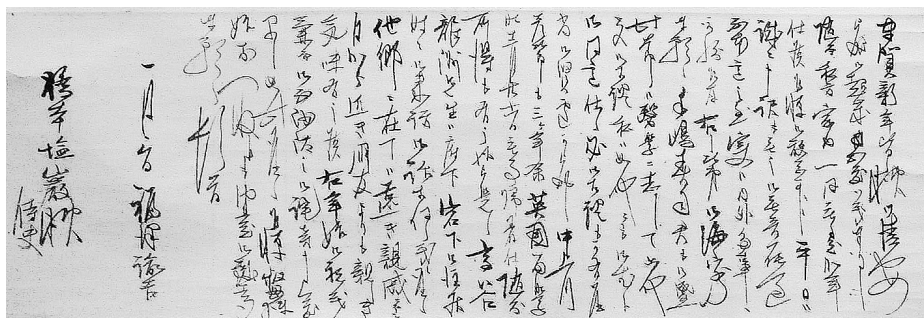
■ 板垣退助宛 明治11年2月1日付

高知に引きこもっている板垣退助に上京を勧めたもの。今まで原本の所在がわからず、『福澤諭吉書簡集』第2巻においても雑誌『太陽』第6巻1号（板垣退助伯談「自由党創立に係る実歴」）を底本とした。今回校訂が可能になり、訂正すべき箇所が生じた。最も大きなものは発信日で、8日ではなく1日であった。



■ 橋本塩蔵宛 明治11年1月3日付【未発表資料】

新年の挨拶と親戚筋にあたる手嶋春司や中上川彦次郎等の近況報告。橋本は福澤の母順の義弟。今まで同人宛書簡は1通（明治13年1月日未詳『福澤諭吉書簡集』第2巻所収）のみ知られていた。



■ 矢野文雄宛 明治24年2月9日付

次男福澤捨次郎の結婚式への招待状。同日付矢野亨宛の招待状とは語句に若干違いがある。『福澤諭吉書簡集』第7巻所収。

■ 中島精一宛 年末詳8月31日付

「平身低頭恐入候」で始まる福澤の為人がよく表れた書簡。今回原文と校訂することが可能になった。『福澤諭吉書簡集』第9巻所収。

福澤諭吉遺墨

■ 故気賀健三名誉教授旧蔵「旧作通俗国権論稿成」1幅〔気賀毅氏寄贈〕

福澤諭吉原稿

■ 故中川日一氏旧蔵 時事新報原稿「七月四日」

【未発表資料】

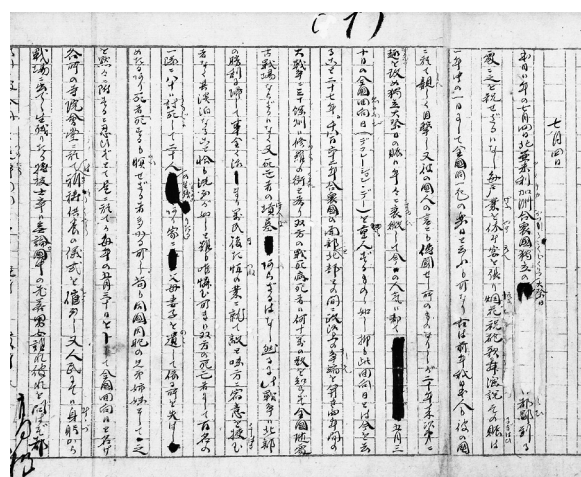
1幅〔中川公夫氏・岡田泰男名誉教授寄贈〕

時事新報社説は原則無記名であるため、未だ知られていない福澤執筆の社説も相当数あると思われる。

この社説も『福澤諭吉全集』未掲載。

福澤関係資料、小泉信三関係資料の寄贈

■ 小泉家旧蔵福澤諭吉遺墨「小泉信吉君を弔す」を始め、小泉信三遺墨「練習ハ不可能ヲ可能ニス」ほか、佐藤春夫画油絵等々、多数の資料が寄贈された。詳細は次号で紹介の予定。



その他原稿

■ 小泉信三草稿「マルクスの批判と反批判」 19枚

雑誌『心』昭和33年7月号に掲載された。のち『この一年』（昭和34年1月刊、文藝春秋新社）に収められた。『小泉信三全集』第18巻収録。

塾員ほか書簡

■ 朴泳孝書簡2通、石河幹明書簡1通ほか塾員書簡7通（含む葉書1枚）

その他

■ 故宮澤茂美氏（昭和20年卒）旧蔵卒業証書ほか 5点〔宮澤英子氏寄贈〕

■ 故山田久一氏（大正10年卒）旧蔵福澤諭吉胸像 1点〔梅村眞佐子氏寄贈〕

■ 諸会議

- *第1回センター会議(6月21日:研究室A会議室)
 - 1. 福澤研究センター講座開設について
 - 2. 慶應義塾開設150年記念資料集の編集・刊行について
 - 3. 福澤研究センター・ワークショップについて
- *第1回運営委員会(6月23日:図書館旧館小会議室)
 - 1. 福澤研究センター規程の改正
 - 2. 福澤研究センター人事について
 - 3. 福澤研究センター講座開設について
 - 4. 慶應義塾開設150年記念資料集の編集・刊行について
- *第3回「慶應義塾資料集」編集ワーキンググループ
(5月24日:福澤研究センター事務室)

■ 人事異動

〈運営委員〉

- *新任 樽井正義(文学部教授)
2004年4月1日～2004年9月30日
 - *逝去 玉置紀夫君 2004年5月28日 享年63
商学部教授 福澤研究センター運営委員(1986年～)
- 【主著】
- ・『起業家福澤諭吉の生涯——学で富み富て学び』(有斐閣, 2002)
 - ・Yukichi Fukuzawa 1835-1901: The Spirit of Enterprise in Modern Japan (Palgrave, 2001)
 - ・Japanese Banking: A History 1859-1959 (Cambridge University Press, 1995)
 - ・『日本金融史』(有斐閣選書, 1994)
 - ・The Life Cycle of the Union Bank of Scotland 1830-1954 (Aberdeen University Press, 1983)

〈所 員〉

- *新任 太田昭子(法学部教授)
西澤直子(福澤研究センター)
以上、2004年4月1日～2006年3月31日

〈事務局〉

- *新任 小川悦子(嘱託)(2004年4月1日付)
- *退職 太田万里子(嘱託)(2004年8月31日付)

■ 資料貸出・協力

- *「明治7年4月下旬ヨリ7月中 慶應義塾学業勤惰表(複製)」1点
衆議院憲政記念館開催の「尾崎行雄と議会政治特別展—没後50年—」へ出品
(5月14日～6月14日)
- *『時事新報』(明治18年3月16日付)「脱亜論」、『通俗外交論』(明治17年6月出版)
EBS 韓国教育放送公社番組の取材に協力(7月2日)

■ 来往

- *マハティール前マレーシア首相、福澤記念室見学(6月2日)
- *Dick Stegewerns 大阪産業大学国際経済学科助教授、堀江帰一資料閲覧(6月18日)
- *国際ヒューム学会、福澤記念室見学(8月5日)

■ 講師派遣

- *西澤直子:銀座慶應会で「福澤先生の女性論」(7月26日)

■ 刊行・編纂物

- *『福沢諭吉の手紙』慶應義塾編 岩波文庫(4月16日刊)

慶應義塾福澤研究センター通信 創刊号

News letter of
Fukuzawa Memorial Center for
Modern Japanese Studies,
Keio University

発行日 2004年9月30日(年2回刊)
編集 慶應義塾福澤研究センター
発行
〒108-8345 東京都港区三田2-15-45
電話 03-5427-1603
<http://www.fmc.keio.ac.jp/>
印刷 (有)梅沢印刷所
